

第三章 創作の軌跡

藪田義雄は生涯で詩・童話・小説の創作、わらべ唄の蒐集・調査、白秋の評伝、校歌や社歌などの作詞などを手掛け、白秋を介した仕事を軸に、幅広い執筆活動を展開しました。「赤とんぼ」や「この道」など郷愁を喚起させる詩で、国民の圧倒的な支持を得た白秋の童謡に惹かれた藪田は、白秋の詩歌の根源のひとつとなる民謡やわらべ唄に魅せられ、昭和17(1942)年以降20数年間にわたって作詩と並行してわらべ唄蒐集を行います。藪田はそこに表れた土着性や固有性に、人間の根源的な感情の姿を見出していました。わらべ唄に惹かれた藪田の作品もまた、同様に人間の普遍的な感情表現を志向するものでした。処女詩集『白沙の駅』や童話『ブリアミ』など藪田の作品には小田原の抒情的な風土が描かれ、大木惇夫は、小田原の郷土の風物が、郷土愛に溢れた藪田の「詩の匂い」をもって感じられるとしました。

主な展示品

- 原稿 藪田義雄「わらべ唄紀行」年不詳
- 原稿 藪田義雄「桃源郷」昭和58(1983)年頃
- 書籍 藪田義雄『夏鶯』帝国教育会出版部、昭和17(1942)年
- 書籍 藪田義雄『ブリアミ』中央出版協会、昭和18(1943)年
- 書籍 藪田義雄『火の独楽』私家版、昭和36(1961)年



北原白秋画「南蛮人の図」
『藪田義雄全詩集』(昭和53年)の口絵に使用された。

藪田義雄処女詩集『白沙の駅』アルス、昭和13(1939)年
白秋の推薦によって刊行することとなった詩集。「序」で白秋は、「私もまた、君のその白沙の駅に君の珠玉を拾ふ心である」と書いた。



没後30年特別展



藪田義雄
——白秋とともに——

会期：平成26(2014)年10月30日(木)～12月17日(木)

会期中無休

開館時間：9時～17時まで(入館は16時30分)

会場：小田原文学館1階第2展示室

主催：小田原市立図書館

小田原文学館

ご挨拶

小田原出身の詩人・藪田義雄(明治35年(1902)～昭和59年(1984))は、小田原中学校在学中に、小田原に居住していた詩人・童謡作家北原白秋のもとを訪ね、弟子入りします。藪田は、昭和5(1930)年～昭和7(1932)年、昭和14(1939)年～昭和17(1942)年にかけて、秘書として白秋の執筆活動を支えました。

藪田の詩や童謡の創作、民謡への関心は、白秋の影響のもとで育まれ、藪田の個性を交えながら発展していきました。

白秋の没後は、白秋会の事務局となり、各地での碑の建立や柳川の生家保存運動などに尽力する一方で、評伝を執筆し、その業績の顕彰に貢献しました。

民謡に惹かれ、創作において土着性を持ち味とした藪田の関心は、「郷土」(地域性・固有性)に「普遍性」を見出すことにありました。生涯をかけてフィールドワークに基づき民謡の蒐集を行いました。

郷土愛に溢れる藪田の作品に触れ、小田原で出会った白秋の門下生たちとの交流を目にすることで、藪田の愛した郷土・小田原の魅力を新たな眼で見つめなおす手掛かりになるのではないのでしょうか。

平成元(1989)年2月14日付けの寄贈により当館13番目の特別集書となった「藪田義雄沙羅文庫」の整理を本年完了し、目録を作成しました。この資料群の素晴らしさを展示の形でご覧にいます。

平成26年10月 小田原文学館



「木兎の家」大正8(1919)年
小田原時代に白秋が一家で居住した家。茅葺屋根に丸太の柱で、正面が「とぼけた木兎の顔」にそっくりなことから命名された。



「白秋とともに」昭和14(1939)年
左端:北原白秋、右:藪田義雄

第一章 生涯

明治35(1902)年4月13日、藪田義雄は、小田原幸町三丁目に父勝二・母りきの次男として生まれました。藪田家は徳川時代から7代続く庄屋の家系でした。

大正4(1915)年小田原中学校(現・小田原高校)に入学すると、文学に熱中します。同級生には閑院宮春仁王がいました。16歳の藪田は、国語教師をしていた小林好日の引き合わせにより、小田原に仮寓中の北原白秋に出会い、門下生となります。白秋との縁はその後20年以上続き、藪田が詩人として歩むうえでのキーパーソンとなりました。中学在学中に同人誌「太陽の子」を創刊し、以来数多くの同人詩の刊行に関わります。中学卒業後は、文学で身を立てるため上京し、法政大学英文科で学び、詩誌に寄稿を重ねます。その後も白秋の知遇を得、秘書を務めたり、同門の大木惇夫や本吉信雄と交流を深め、ともに出版事業に関わります。

主な展示品

- 文集 「太陽の子」創刊号、太陽の子社、大正9(1920)年2月
- 雑誌 『郷愁』創刊号、藪田義雄発行、大正12(1923)年4月
- 書簡 藪田義雄「北原白秋宛書簡」昭和5(1930)年11月15日
- 書簡 春仁王「藪田義雄宛年賀状」大正11(1922)年1月
- 草稿 府川恵造「南国の儂」昭和3(1928)年

第二章 白秋とともに

大正7(1918)年10月、16歳の藪田は小田原中学校教師小林好日の紹介で、城山伝肇寺に仮寓中の北原白秋を訪ね、門下に入ります。藪田は白秋の民謡への関心を受け継ぎ、小田原の自然に根差した土着性溢れる、素朴で伸びやかな作風の詩や童謡を創作しました。白秋の勧めで刊行した『白沙の駅』は郷土小田原をノスタルジックに詠んだ作品です。以後20数年間、藪田は弟子、秘書として文筆活動を補助したり、看病したりするなど献身的に白秋を支えました(第一期:昭和5年11月～昭和7年6月、第二期:昭和14年～昭和17年5月、第三期:昭和17年10月～同11月)。戦時中は、白秋、山田耕筰、大木惇夫、弟北原鉄雄が経営した出版社アルスなどとの関わりのなかで、時局に迎合した創作活動を行います。戦後は門人の要として白秋会事務局の任にあたり、白秋碑や生家保存運動など顕彰活動を支え、自身も『評伝北原白秋』(昭和48年)ほか白秋関連の書籍を刊行し、白秋の業績の再評価を促す活動を行いました。

主な展示品

- 原稿 北原白秋「空に真赤な」『白秋小唄集』大正8(1919)年所収
- 原稿 北原白秋「歌へ六片の歌を」大正10(1921)年8月
- 原稿 藪田義雄「評伝北原白秋」第13章、昭和48(1973)年頃
- 草稿 藪田義雄「国民歌謡集」第一輯 年不詳
- 書籍 藪田義雄『白沙の駅』アルス、昭和13(1938)年
- 書簡 北原菊子「藪田義雄宛書簡」昭和47(1972)年11月28日